

研究主題「社会に開かれた教育課程の実現に向けた教頭の役割」
～「水俣科」を通して、ふるさとへの誇りと未来を拓く力の育成を目指して～

提言者 芦北・水俣教頭会 水俣市立水俣第二中学校 吉田 稔

1 主題設定の理由

芦北・水俣地域は、県の南部に位置し、水俣市、芦北町、津奈木町の一市二町で構成されている。東には九州山地が走り、西には不知火海が広がる風光明媚な地域である。その中の水俣市には、7つの小学校と4つの中学校がある。

水俣市は、ふるさとを愛し、人や自然、地域の伝統や文化を大切にする人間性豊かな子どもたちを育てる「心豊かなひとづくり」に取り組んでいる。

水俣市は水俣病という公害を経験し、そのことで差別や偏見を受けた事例も少なくない。また、そのような差別や偏見を恐れて、進学先や就職先で自分が水俣出身であることを言い出せないというようなこともあってている。このような行動を起こさせないように、水俣のことを知り、誇りに思い、郷土水俣を愛する心豊かな子どもたちを育っていくことをねらいとして、小中学校において「水俣科」の取組が始まった。この「水俣科」は、総合的な学習の時間を中心に、各小中学校が自校の実態に応じて学校・家庭・地域・行政等と連携して行う。地域人材を活用することが多いため、平成26年度から土曜授業を実施し、その中で「水俣科」の取組を行うこととした。

新学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」の重要性が示されている。水俣市の中学校が取り組んでいるこの「水俣科」は、まさに「社会に開かれた教育課程」である。そして、これを実現させるには、地域社会と連携・協働していくためのコーディネート役としての教頭の役割が重要になってくると考えこの主題を設定した。

2 研究のねらい

児童生徒が地域の様々な人々と関わりを持ちながら、ふるさとを愛し、人間性豊かな生きる力を育むために、「水俣科」の取組において、地域人材を活用するための教頭としての関りについて研究する。

3 研究の経過

- (1) 「水俣科」実施に向けて、平成26年度から水俣市の中学校において土曜授業が始まる。
(令和3年度の方針)
 - ・総合的な学習の時間における「水俣科」の授業を行う。
 - ・「水俣科」による体験活動と関連付けたり、郷土資料を使ったりしての道徳の授業を行う。
 - ・保護者や地域住民等をゲストティーチャーに招いての授業を行う。
 - ・実施回数は年7回とする。(6月、7月、9月、10月、11月、12月、1月)
- (2) 令和3年度の市教頭会で、今年度の研究の方向性を確認。
- (3) 各学校にて「水俣科」の取組

4 研究の概要

(1) A小学校の取組

5年生で「郷土水俣への愛着～水俣で生きるわたし」をテーマとして取り組んだ。水俣の自然がどのように保たれているかを知り、郷土水俣への愛着へつながるように学習を進めた。

① 水俣湾の現在を知る

水俣の自然に詳しい方や実際に漁をしておられる漁師さんを招き、水俣の

海を知る体験学習がスタートした。

まずは、水俣湾の現在の様子について生き物の写真や水中映像を見ながら、水俣湾のことについて知る活動を行った。教頭は、5年生のテーマや、昨年度の実績から、事前に担任等と打合せをして講師に連絡を取る段取りをしたり、事前の打合せを行ったり、当日の準備の確認を行ったりした。

② 水俣で獲れた魚に触れる

水俣の海で漁師さんが獲った魚介類から、いろいろな生き物がいること、生き物の実際の形、特徴、色、行動、触感などを観察し、生態、生活史、種間関係なども知った。漁師さんからは、どんな方法で獲ったとか、海の幸についての話も聞いた。



③ 生き物スケッチ

スケッチには、その生き物を選んだ理由、生き物の形の特徴、どんな生活をしていると予想するか、描いた生き物の名前（知らなければ、自分でつけるとしたらどんな名前にするかとその理由）を付け加えた。

④ 学習発表会での発信

年間のまとめでは、自分たちの地元の海をどんな海にしたいか（ビジョン）、そのためにはどうしたらいいか（行動目標）の意見を出し合い、まとめていくことになる。まとめたことを学習発表会で発表し、保護者や地域の方々にも発信した。

【教頭の関わり】

教頭としては、各学年のテーマに対して、適切な講師を紹介したり、講座を申し込む手配をしたり、市の地域コーディネーターにつないだりと、充実した活動になるための指導・助言を行ってきた。今回、5年生のこれらの活動の間には、県の環境立県推進課で行っている「くまもと環境出前講座」に応募して10月26日に講師招聘して学習を深めることができた。子どもたちの「生」「本物」を見た時の目の輝きは素晴らしい。その輝きを大切にしながらその後の学習の充実が図られるよう、教頭として今後もサポートしていきたい。

(2) B中学校の取組

(1年生)

テーマ：「ふるさとの自然・農林業・歴史と文化を知ろう」

① 水俣の偉人「徳富蘆峰」「徳富蘆花」について学習

徳富蘆峰・蘆花生家や水俣市蘆峰記念館でかけ、展示物見学や説明を聞いてより理解を深めた。また、事前学習ででてきた疑問を質問し答えていただいた。

② サラダたまねぎ農家Mさんの講話

サラダたまねぎについて、植え付けの行い方や生産者として気をつけていることを話していただいた。

③ シラス漁Sさんの講話

シラス漁の実態について講演をしていただいた。



(2年生)

テーマ:「F地区の干潟を守ろう」

① F湾の干潟環境調査

F湾の干潟に行き、そこに住んでいる生物を調査した。名前の分からぬ生物などは、後から調べた。班ごとに見つけた生物を記録した。

② F湾干潟環境調査考察

F湾の環境について、ひのくにベンツ研究所のMさんより講話をしていただき、以前調べた干潟の生物の状況と過去に行った環境調査を比較し、F湾の環境を学習した。



(3年生)

テーマ:「地域の伝統芸能を伝承しよう」

① 棒踊り

F地区に伝わる棒踊りを2年生の3学期から地域の方々に来ていただき、学習した。体育大会では、袴を着て披露した。



【教頭の関わり】

グランドデザインの中の「身に付けさせたい力」と総合的な学習との関連を一覧にした。それを見ることで、全体の計画がわかり、それぞれの活動の中で「どんな力を身に付けさせたいか」を意識した取り組み

になるようにした。

また、地域に発信していくためにも、水俣市の全小中学校が作成し、全小中学校に配付される「学校ウォッチング」に、総合的な学習（水俣科）の取り組みを中心にまとめようとしている。



(3) C中学校の取組

1年生の水俣科の学習では、「山・川・海学校」と題して、ふるさと水俣の暮らしと自然とのかかわりについて学び、環境に優しい暮らし方について考えることをテーマに取り組んだ。

① 「山学校」

地域にある交流センターの方を講師に、山の保水力や自然のしくみ、山が人の暮らしに与える恩恵等山の役割について学んだ。講師の方の豊富な体験をもとにプレゼンテーション資料を使って、生徒の興味を引くような内容の講話をされたり、学校近くの山林散策を行ったりした。「皆伐」を行うことでのメリット、デメリットを考え、環境破壊による地球温暖化と結びつけ、皆伐を必要最小限に行うことを学んだ。

② 「川学校」

熊本県環境センターや水俣川漁協組合に協力してもらい、川と人々の暮らしや人々の暮らしと川に与える影響について学んだ。水俣市川漁協組合の方は、水俣にある川に詳しく、利水や水

力発電の利用など説明を受けながら、現地調査も行った。

③ 「海学校」

熊本県環境センターや水俣漁協組合、ダイビングショップの方に協力してもらい、水俣の海の生態系や海と人々の暮らしについて学んだ。現在の水俣の海には、ヒメタツというタツノオトシゴの新種を始め、多くの生物が生息しているが、人が海に捨てたプラスチックゴミが多くあり、生態系に影響を及ぼしていることを学んだ。

【教頭の関わり】

コロナ禍により、講師をお願いしたり、体験活動を実施したりすることが難しくなっている。そのことをふまえ、総合的な学習の時間の主査を中心に担当学年で実施に向けた協議を何度も行うようにした。急遽、内容を変更しなければならないこともあったが、感染対策を最大限行いながら、できる限り実施できるようにした。

また、講師の依頼は、これまでの実績をもとにしたり、関係機関に紹介してもらったりして行った。コミュニティスクールを活用し、学校運営協議会でも地域学習の方法や地域人材の活用について協議・助言をいただいた。

(4) その他の学校の取組

- ① D 小学校では、平成 29 年度より地域住民と児童がともに学ぶ「鶴の子スクール」を開講して児童の豊かな心の醸成と地域の活性化を図ってきた。令和 3 年度の取組としては、「パソコン教室」、「湯の鶴音頭の講習会」、「紙漉き体験教室」、「ニューススポーツ体験教室」、「昔あそび」等である。また、七夕やクリスマスの時には、笹竹や杉の木を地域の方に準備していただいた。その計画、案内、講師依頼、スクールの進行を教頭が行った。
- ② E 小学校では、「水俣ハイヤ節」の伝

承を行っている。今年度も全学年で講師を依頼し、歌詞や踊りの意味を理解したうえで、練習を行った。また、この活動の一つとして「魂入れ」を行った。この活動には別の講師(胎児性水俣病患者の方)をお招きし、水俣病についての講話をしていただいた。

教頭としては、日程調整を含めた講師の依頼、謝礼の準備、当日のサポート、児童の動きの確認等を担当者と連携して行った。

5 研究の成果と課題

(1) 成果

○水俣の自然や伝統芸能、水俣病からの再生に向けた取組を知ることによって、子供たちの多くが水俣のすばらしさを実感できた。「水俣が好き」と答える子供たちが多数いる。

○地域の優れた人材との連携により、継承されてきた郷土芸能を子供たちに知らせるよい機会となった。また、地域の方々は、子供たちに教える喜びを味わっていただくと共に生きがいを感じていただけている。

○コロナ禍の中、活動が制限されたことが多かったが、講師に来校していただけたり、リモートを利用したりするなど、新しい形の取組を行うことができた。

(2) 課題

- 各学校が単独で活動している事例が多い。学校運営協議会で熟議し、学校と地域社会が課題を共有し、地域学校協働活動本部とも上手く連携を図る必要がある。
- 教頭自身が地域の中にどのような学びがあるか(人、もの、こと)を知ることと、それをいかに効果的に学校教育に結び付けていくかというコーディネート力が必要である。